
コナン、元旦パニック

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナン、元旦パニック

【Nコード】

N9046D

【作者名】

千景

【あらすじ】

初詣に向かった、コナンと蘭、小五郎の三人は、そこで事件に出くわした。果たしてコナンは・・・

「ったくよ、なんだってこんなとこに來なきゃいけねえんだ」

「もー、ぶつぶつとうるさいわよ。もうここまで來たんだから、あきらめてよお父さん。往生際が悪いわよ」

「だってよ、蘭・・・正月ぐれえ家でゆっくりしようぜ、なあ」

「もう、いつもゆっくりしてるじゃない、お父さんは。それにお正月と言えば、初詣でしょ。ね、コナン君」

「そ・・・だね」

（でも、だからって元旦に來なくてもいいんじゃないか？今回ばかりは、おっちゃんに賛成だぜ）

ここは米花神社鳥居前。この辺りではそこそこ大きな神社で、町内の人間はもちろん、他の地区の人間も参拝にやってくる。その為、正月ともなると、あまりの人の多さに、境内への入り口は無き等しかった。

「本当にここを通って行くのか？蘭？すっげえ人だぞ」

小五郎は前方で待ち構えている人の海を見てげんなりとする。

「えー、せっかく着物も着て來たんだし、お父さん達も袴着たんだからお賽銭だけでもあげに行こうよ。ねっ、そうしょ。・・・ということで、行くわよ二人とも！」

（蘭のやつ、たんに着物が着たかっただけじゃねえのか）

新一と小五郎の二人は半ば蘭の勢いにおされ、しぶしぶ後について行った。

「あ、コナン君は、はぐれたら大変だから手を貸して」

「あ、うん」

新一は言われるがまま手を伸ばし、その手につかまったが、なかなか思うように前へ進む事ができなかった。

「あっ、あっ」

繋いだ手が離れそうになる。

何度か手を繋ぎ直そうとしが、それは人波によって阻まれた。

「コナン君、すっかりつかまって」

「う、うん。あ、蘭姉ちゃん」

そうは言うが、この小さな体では前も見えない状態だ。手を繋ぐとしても、簡単にはいかった。ついには人波に押され、蘭からどんどん遠ざかって行く。

「コナン君！」

蘭は必死に手を伸ばし、コナンの手をつかもうとするが、それは失敗に終わった。

「ったく、しょうがねえな」

（え・・・）

がつしりとつかまれた大きな手に、新一は驚き、その手の主を見上げる。それは、小五郎だった。

「今だけだからな」

「わっ」

引き寄せられ、突然訪れた浮遊感。視界が開け、前方に鳥居、下には人の絨毯ができている。

新一は小五郎の両腕に抱え上げられ、肩車をされていた。

「お、おじさん」

おかげで、人波に流されずにすんだのだが、妙に照れくさかった。普段は自分の事を気にもかけない小五郎が、起こした行動にも、高校生にもなって肩車をされている自分にも。

新一は、小五郎の肩の上で居心地が悪そうに身じるぎをする。

「こら、動くなコナン！このまま、人の下敷きになりたくなかったら大人しくしろいつ。俺だって好きでやってんじゃねえからな」

「あら、よかったわね、コナン君。肩車なんかしてもらって」

なんとか人混みを掻き分け、二人のもとに近づく事ができた蘭は新一を見上げる。

「恥ずかしいよお、ねえ、おじさん」

「なーに言ってやがる。恥ずかしい事があるものか、ガキのくせに。」

仕方ねえだろ、この人の多さじゃ、お前みたいなチビには危ねえかな」

「コナン君ったら、照れちゃって。私も小さい頃はよく肩車してもらったわよ」

「・・・」

時々、自分の姿が七歳の子供である事を忘れる。

そうだ、自分は高校生であって、高校生ではないのだ。肩車をしてもらっても少しも恥ずかしがる必要はない。しかし、そう考えても、やはり照れくさいと思う自分がいる。また逆に、どこかで懐かしさを感じている自分がそこにいた。

（そっぴや、俺も小せえ頃、親父によく肩車してもらったっけ・・・）

少しばかり懐かしい気分に浸っているうちに、ようやく賽銭箱の前まで来ることができた。

「やっと、着いたあ。はい、お父さん。これ、コナン君ね」

「たかが賽銭に、百円はもったいない。十円はねえのか」

「もう、お父さんったら、貧乏くさいこと言わないでよ」

二人は蘭から小銭を受け取り、賽銭箱に投げ入れる。信仰心もないのに、お参りとなると、熱心に願ってしまうのが日本人の常というものだ。

三人とも、パンパンと両手を鳴らし、願いを思う。（どうか、元の体に戻れますように）

殊更に新一は真剣だった。早く黒の組織を見つけ出し、元の自分の姿に戻りたかった。このまま、コナンの姿でいるわけにはいかない。

新一はあらためて心に強く思い、そう決心するのだった。

閉じていた目を開くと、ニヤケタ顔をして小五郎が何かブツブツと呟いていた。微かに「ヨウコ」って言う声が聞こえてくる。

（まったく、スケベそうな顔して、何を考えているか一目瞭然だな、こりゃ。たかが賽銭って言ってたのは誰だ？）

はははと乾いた笑いをもらし、新一は蘭の方を見る。手を合わせ下を向く蘭の頬は、何故かほんのりと赤みを帯びていた。

（何を考えてんだ？蘭の奴）

「なあに、コナン君？」

「え、あ、あの、蘭姉ちゃんは何をお願いしたのかなーと思って」
思わずじつと見てしまっていた事に気づき、慌ててごまかす。

「へへへ、内緒。口にすると願い事叶わなくなっちゃうもの。そういうコナン君は何をお願いしたの？」

（言える訳ねえだろ、工藤新一の姿に戻りたいなんて）

「僕も内緒。あ、そうだ、蘭姉ちゃんもう一枚小銭ちょうだい。だめ？」

「いいけど、どうしたの？」

「うん、もう一つお願いしとこうと思って」

「そう。はい、じゃあ百円」

「ありが・・・」

小銭を受け取るうとした瞬間、背後から女の悲鳴があがった。

「きゃああっ！」

「な、なんだあ！？」

神社では不釣り合いな叫び声に、小五郎は驚き背後を振り返る。すると今度は左側から悲鳴があがった。

「いやああっ、嘘でしょお！」

「やだあっ！あたしのバッグが！」

（何だ？何が起きてるんだ）

次々にあがる叫び声。新一は周囲のただならぬ雰囲気さに辺りを見回す。

「おじさんっ見て！」

指差した女の着物の袖がスッパリと裂け、腕にうつすらと血が滲んでいるのがわかる。明らかな刃物によるものだ。

「こりゃあ、一体・・・」

「誰かに刃物で切られたんだよ！」

「んなこたあ、分かってるよ！」

「ねえ、なんなのよお、お父さん」

蘭は不安そうな表情を浮かべ、二人を見上げる。

（通り魔・・・か。他人の衣服や、持ち物を切って喜んでやがるんだな。カッター？いや、切れ味からするとかなりの代物の可能性が高い。犯人はまだ近くにいますはずだ）

「おじさん、あっちの方が、人すいてるから行って！」

「お、おう」

比較的人の少ない場所へ移動し、新一はそれらしき人物がいないか、注意深く辺りに目をやる。

一刻も早く犯人を見つけなければ。新一は焦りを覚えていた。いつ犯行の対象が衣服や物から人間に変わるか分からないからだ。

「！」

一人の男の姿が目にとまる。ブルーのジャケットにグレーのズボン。マフラーをしており、口元が隠れていた。帽子もかぶっている。一見普通の人物に見える。だが、その殺気立った目は隠せていなかった。

（いた。こいつか）

探偵としての勘がこの男だと告げる。

男はジャケットの懷に手を忍ばせていた。刃物を隠し持っているのは明らかだ。だが、捕らえようにも、こんな人混みの中で暴れまわられても困る。どうしたものかと、新一が考えを巡らせていると、男は人混みを掻き分けゆつくりと動き出した。

嫌な予感がした。男の目線を追うと、そこに、蘭の姿があった。

（まさか・・・）

男がこちらに向かって少しずつ近づいて来る。男の目が一瞬笑ったような気がした。

「蘭！後ろっ！」

「えっ？」

その声に振り返ると、サバイバルナイフを振りかざした男がまさ

に、自分を切りつけようとしている瞬間だった。

「はあっ！」

蘭は半ば条件反射で、男の腕を脇に抱え込む。

すかさず男の手からナイフを払い落とし、顔面に掌打をくらわせた。男は思わぬ反撃に慌ててその場から逃げ出す。

「あ、待ちなさい！」

蘭は後を追おうとしたが、着物がそれを阻む。

「おじさんっ、追って！」

「おうっ」

小五郎は新一を肩車したまま男の後を追う。しかし、その姿は人混みの中にかき消えてしまった。

「ちきしょうっ、どこいきやがった、あのヤロー」

「おじさんっ、右！」

周りより高い位置にいた新一には、かろうじて、男の姿が見る事ができた。

「あっちの社の方にいったんだ！」

「ヨッシャ！コナンでかしたっ」

小五郎は新一の指差す方へと急ぐ。二人が進む方向には改装中の社があった。

「いねえぞ、確かにこっちに來たんだろっな」

「間違いないよ」

社の前まで来ると、他の人間は誰もいなくなった。

この先は一本道である。通り魔がこの辺りに潜んでいるのは間違いない。

「よし、コナン。お前ここでまってる」

「えっ」 新一は小五郎の肩から下ろされる。

「僕も行く」

「ダメだ。相手は刃物を持っていた通り魔だぞ。お前は危ねえから、ここで大人しくしてろっ」

「あっ」

言うが早い、小五郎はこの先の道を通り直ぐ走って行く。新一はその背を見送るしかなかった。

「くそっ」

犯人を追いたかった。子供だと思い通りにならない時がある。

こんな時、子供の姿である自分に苛立ちを感じずにはいられなかった。(・・・?)

先程の騒ぎが嘘かのように静まり返っている中、ふと、人の気配を感じ新一は辺りを見回す。

しかし、誰もいない。

(今、確かに人の気配が・・・)

一瞬感じた気配をもう一度探ろうと、注意深く周りを窺う。その時、視界の隅で人影が動く。

(いた・・・)

犯人だ。この先に逃げて行ったとばかり思っていたが、近くで息を潜めていたのだ。

「それで隠れたつもりかい？」

「！」

犯人は答えない。新一は男が隠れている社の方へゆっくりと歩き出した。

口元にはうつすらと笑みを浮かべている。

「出てきなよ。隠れても無駄だよ？通り魔のお兄さん」

新一本来の姿が垣間見えた。

常に子供のふりをしてきた偽りの仮面が今、剥がれる。言葉使いも、顔の表情も大人のそれへと変化した。

まぎれもなく、今、ここにいる人間は江戸川コナンではなく、名探偵工藤新一その人であった。新一の歩みが止まる。男が社の陰から姿を現したのだ。

「まったく、正月そうそう何を考えてんだか。どうする？大人しく自首するかい？」

「生意気な口を叩くな。ガキが」

「もう一本持っていやがったのか」

その手にはナイフが握られていた。

新一は男から視線を外さず、隙を窺う。時計型麻醉銃をいつでも発射できるよう、後ろ手に準備した。

「着物を切ったり、つまんねーことしてんじゃねえよ。女性しか狙えねえ、小心者が」

わざと相手を挑発する。神経を逆撫でし、飛びかかって来たところを麻醉銃で撃つつもりだった。

「このクソガキがっ！」

思惑通り男は新一の言葉にキレ、飛びかかる。その一瞬の隙を見て、新一は麻醉銃を撃った。

しかし、それは失敗に終わる。犯人に刺さるはずの針が、首に巻かれたマフラーによって、阻まれてしまったのだ。

（しまった！）

目の前でナイフが光る。

避けきれない。

そう思った瞬間だった。目の前に影がよぎる。そして聞こえたドンという大きな音。

それはまさに一瞬の出来事だった。

「大丈夫か？コナン」

頭上から聞こえて来る声は毛利小五郎その人だった。

「お、おっちゃん・・・？」

小五郎の思わぬ登場に驚いた。男は足元で完全にのびている。見事な一本背負い。

日頃のだらしない姿を見ていると想像もつかないが、小五郎は柔道の有段者だった。見かけによらず強いのだ。

（カ、カッコイイ・・・）

「たく、もしかと思って、戻って来て正解だったな」

小五郎の声に、はつと我に返る。小五郎が決めた一本背負いに、不覚にも格好いいなど思ってしまった自分が急に恥ずかしくなり、新一はぶんぶんと頭を振り回す。

「おい、何してんだ？・・・怪我はどこもねえのか」

「だ、大丈夫だよ」

「・・・怪我ねえんだったら、いつまでも座りこんでないで、立て」「あ、うん」

新一は立ち上がり、袴に付いた砂を払い落とす。

「・・・ところで、おじさん何してるの？」

見ると小五郎は、木に巻き付けてある、しめ縄を取り外そうと必死になっていた。

「決まってるだろう、これで奴をふんじばつとくんだよ。ちきしょう、案外かてえな、この結び目」

（こ、このおやじは・・・）

「これでよしと」

通り魔の男を手近な木に縛り付け、手を叩く。

「行くぞ、コナン」

「行くって・・・この人どうするの！？」

「ああ、後で警察に連絡しときゃいいだろ？こいつ受け身もとらずに、もろに地面に突っ込んだからな。当分目を覚まさねって。それに、さっきの騒ぎで警備員も沢山うろついてるしな」

「で、でも」

「いいんだよつ、正月早々つまんねえごたごたに巻き込まれるのはごめんだからな。とつとと、蘭見つけて、帰るぞ」

小五郎は有無も言わず、一人ですたすたと歩いて行く。

「あ、待つて」

新一は慌てて、小五郎の後を追った。そして・・・。

「・・・おい」

「え？」

小五郎の声に頭上を仰ぎ見る。そこには、心なしか戸惑う様子の

顔があつた。

何を不思議そうな顔をしてるんだと、新一はぼんやりと考える。

「おじさん？」

「・・・やっぱ、どこか怪我してるのか？」

「うんうん、してないけど何で？」

「おめえ、何なついてるんだ？」

その言葉に新一は初めて気がついた。自分が当たり前のように小五郎の手を取り、隣に並んで歩いているという事を。

無意識の行動だった。

子供の姿になってから、蘭と手を繋いで歩く事が多くなっていた新一は、自然と自ら手を伸ばすようになっていたのだ。

「ご、ごめんなさい」

（何やってんだ！？俺っ）

新一は自分がとった行動に驚き、慌てて手を離そうとした。すると、その手を小五郎が握り返す。

「！」

見ると小五郎は新一から顔を背けている。「・・・いいか。今回だけだからな。ま、間一髪だったからな。」

そう言う小五郎の耳は赤かった。

新一もつられて顔が赤くなる。

おそらく小五郎は、通り魔に襲いかかられそうになった新一が怖がつていると思っただろう。

大人である小五郎からしてみれば当たり前の事だろう。しかし、高校生である新一にとってはとても照れくさい事だった。

小五郎の手には慣れていない。蘭と違って、大きくて、ごつごつしてて、そして、暖かった。

「本当に、今回だけだからな」

小五郎は念を押すらしくないことをしていると重々承知しているので、繋ぐ手もどこかぎこつない。

そんな小五郎の様子に新一は思わず笑みをこぼす。

「な、なんだよ。なにがおかしい」

「へへっ、何でもなーい」

（らしくねえことするから、こっちまで照れる。ま、親子ごっこもたまにはいいか）

「ねえ、おじさん」

「なんだ」

「僕ね、小さい頃よく肩車してもらったんだ。すごく、高いんだよ」

「？今も十分小せえじゃねえか」

「蘭姉ちゃんを見つけやすいと思うんだ。だから、ね？」

「・・・しょうがねえなあ」

そう言つと、小五郎は新一ね体を抱き上げ、肩の上に乗せる。

「わあい、高い」

我ながら子供のフリが上手くなったと内心思いながら、新一は必要以上に喜んでみせた。しかし、心のどこかで、それを楽しんでいる自分に気がついていた。

小さい頃、母親は女優業に忙しく、小説家の父親は職業柄、部屋にこもりがちだった。

そんな両親のもとで育った新一には、遊んでもらった記憶があまりなかった。だからかもしれない。

「こら、じつとしてろ！」

「はい。そだ、おじさん。後で百円頂戴。さっき、蘭姉ちゃんにもらいそびれたから。ぼく、もう一回お参りしたいんだ」

「んなもん一回で十分だ」

「お願い。一つお願い事忘れたんだよ」

新一の猫なで声に、しぶしぶ小五郎は承諾する。

「もう一回お参りするほど大層なお願いなのか？」

「うん」

新一には密かに思う事があった。

元の姿に戻りたい。その切なる願いは本物だ。だけど、一方で、こうして蘭と小五郎と三人で一緒にいるのも悪くない。

コナンの姿でいる間だけでも、こんなふうにしていられたらいいなと思うのも事実だった。

できうるかぎり、ながく、一緒に。

「どんなお願いだよ」

「内緒だよ。さ、蘭姉ちゃん探しに行こうよ」

「ああ、そっだな」

二人は元来た場所へと向かう。

父親に肩車をしてもらって、笑う子供の姿は誰が見ても微笑ましい。

はたから見れば、二人はそんな仲の良い親子に見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9046d/>

コナン、元旦パニック

2010年10月8日13時39分発行